悠野集

雜上

土岐文庫
文庫17
W46
10

文庫 17
W46
10

昭和六十年二月一日
故善唐氏寄贈

010185194944

天
寄月雛
月契秋
朝風
風弦半ヶ程
海村煙
夕雲
雷
蕭々暗雨打窓聲
寄海朝
地儀

天象
高山待月
浦月　星
海路風
谷風
鹽屋煙
薄暮雲
雨
徑雨
夕
山

日
月照山水
風
池月久明
夕風
水風驚夢
夕煙
雲
湖邊雲
山中雨
曉
夜
遠山

月
雛月
久契明月
夕山風
故郷風
浦煙
嶺上雲
海上雲
古渡雨
朝
庚申夜待曉
崖

雛上目録一

名所山　杣山　谷
森　野亭　野
獨行關路　驛うまや　道
夜山路　夜路　細徑
古橋　天橋立　水
雨後山水　潦水　遣水
浪聲　池　池水久澄
滝水　滝　山中滝
瀧水乱糸　らの滝　龍門滝
川　杣川　遠聞河浪
河邊舟　堤　堰水

谷水　山畝
原　關　山路
行路　古宅　橋
水邊郁夷　松陰泉　山水
浪　滝　瀧糸
沼水　山中滝音　布引瀧
温泉
河水久澄　河水流清
瀬　迅瀬

ふち　海　暁海　海　海暁
海辺興　海邊朝　海辺夕　海路　海邊
海路山　海路日暮　海路朝　海路遠　海路鳥
水路　海村　濱　海路遠　海路名所
磯浪　島　名所島　濱砂　湊浪
湖　國　郡　浦　渡
禁中　居所　稀居　都　名所都
垣　井　隣　遠郷　新室　庭
市　遠村　遠郷　水郷　里　山里
故郷松　故郷柱　水郷　与宮　故郷
閑居　閑居木　閑居苔深　鹽屋　仙家
閑居水聲　閑中

閑中燈　幽居　草庵
幽栖思友　家
春秋の別　夏離別　別
遠別離　遠別離　送別
留別　懸命別　水邊別
旅中別　山家別　別れ妹
老別　寄無常別　別夫
流人別　後時相見難何時　旅
夜者仍別離

幽居客来　深山幽居
隠家　古寺
秋の別　冬乃日の花
近別離　入唐
いそがてまつの花　蘭別
信濃へゆく人を焼物に成て
旅行人小ぬさ　火打ち
行人小鏡を
悔離別
立旅

帰旅　朝旅　暁旅　旅夕
夜旅　旅嵐　春旅　夏旅
秋旅　秋思故郷　山旅　蘭旅
野旅　海旅　寄海旅　河邊旅
経日旅　旅夢　旅行　月前旅行
旅行風　旅行雨　旅祝言　旅行日暮
暁旅行　旅行暁　旅行夕　夕旅行
旅宿　月前旅情　月前旅宿　山路旅行
旅宿曙　旅宿朝　旅行重日　連夜旅宿
山家旅宿　田家旅宿　夕々旅宿　旅宿嵐
水邊旅宿　旅宿波聲　蘭旅宿　旅宿夜
海邊重宿　海邊旅宿　野外旅宿
海辺旅宿　原上旅宿
旅宿夢

旅宿夢覺　旅宿寢覺　旅宿憶都　旅宿述懷　旅宿遠望
羇中　羇中送日　羇中晩日　羇中暮　羇中夜
羇中曉　羇中雲　羇中露　羇中嵐　羇中晩嵐
羇中秋　羇中冬　羇中原　羇中山　羇中嶺
羇中路　羇中途遠　羇中潮　羇中野　羇中河
羇中瀧　羇中渡　羇中海　羇中磯
羇中浦　羇中島　羇中濱　羇中待舟　羇中舟
羇中鳥　羇中泊　羇中思友　羇中憶都　羇中松
羇中枕　羇中衣　羇中別　羇中望　羇中眺望
羇中思　羇中曉思　羇中情　羇中幽情　羇中涙
羇中夢　羇旅　羇中風　羇旅雲　羇旅夏
羇旅冬　羇旅水　羇旅河　羇旅山
羇旅森　羇旅樹　羇旅路　羇旅里
羇旅遠　羇旅眺望　旅泊　旅泊待月
夜旅泊　旅泊風　旅泊浪　旅泊鳥
海濱重夜　旅館嵐　旅店雨　旅店曉
津宮　山家　山家松風　山家風
山家夜嵐　山家雲　山家雨夕　山家煙
山家暮　山家夜　山家送年　山家經年
山家柱　山家杉　山家松　山家樋
山家流水　山家待人　山家人稀　山家水
山家述懷　山家夢　山家客来　山家尋人
山家幽思　山居思都　山居
雜上目四終

山亭　山館　田家　田家煙　田家雨
田家思　田家幽思　田家秋興　田家老翁　田家鳥
庵

早稲田大学図書

拾遺集巻之十

雜之部上

天　日
天象　月

万　たれかこのたびのみよりとちくわまくらなる　大津宮
同　山のたにさくらをとこ天の糸をつるゝ光をくしよりと　坂上郎女
古　たつの川もみぢをなかれてかけるにしきのたえまなく　読人不知
代　いくたびの月ぐさをつゝたれかこの世をうしとなげくらん　返答問答
万　しんぐの地かるぎろひたつをえてうをまれに月をみるかな　名を失る
同　つゝみの岩つゝぎをかくさしとゆるくよぬるうくこそ　中大兄命
拾　をのゝうてゝ山みをかくるうを鶴日々日のさすがてをこそ　蟬丸
千　ぬぐ代いをたてぐゝ山野るひたてゝ浪ハたきでとぞおもふ　大宮太政
続　いくたびの天のぐゝ山ゆるひ秋くこゝを光さすらん　新撰
万　いのゝ海ふかきたゝ浪ちゝ月の舟足たれ林ようぎこゝるをゆ　人麿
拾　たてゝふるをとハ月ふかくこの月をとゝ月をとゝ月をとゝ　清少納言
同　ぬぐむるふ拾ゝ月ふくこの月をとゝ月をとゝ月をとゝ　為生

雜月

寄月雜

高山待月

拾 世中へるに物思ふとしもなけれども月に幾度ながめしつらん　具平

勅 榊とらし三室のます鏡その山の端と月ともろとも　家隆

代 誰か又あはれかけし神代の月かげ忘れぬ袖とおもひ知らなん　成實

同 曇りなき鏡にむかふ心地して君の後にぞ月はまばゆき　教仲

同 老となるうらみもさえしらねどもそむけず月にそふかげ　信実

同 うしとてもいづくにかよはいとふべきうきよの月のかげぞかなしき　俊恵

古 大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの　業平

拾 梓弓はるかに見ゆる山の端をいかでか月のさして入るらん　ちのへ

代 更けぬれば我よそならねに寝する人もくまなく月のてる夜也けり　和泉式部

拾 久かたの天津空なる月なれどいづれの水に影やどるらん　躬恒

詞 うら初めの浮世の中をわたるとて月の光ぞうらやましくて出づる月かな　良暹

万 如何にして山の端出づる月の影よしゑやし待ちてかへらぬ　坂上郎女

同 見え見えずかくれ出づる山のはをいざよふ月を出でそかねつる　満誓

古 おそく出づる月にもあるかなあしひきの山のあなたも惜しむべらなり　不知読人

月照山水

池月久明

久契明月

月契多秋

浦月

星

風

夕風

夕山風

六 暮にまづ秋わかぬ月を山の端に出づる里にえおそしと見まし川　美作

代 みな月の田にやどれる月をとねんやまりの川とえいひえじめらん　河尚

同 さやけき山の岩間をせばみくもりなきうつる月さへ神さびにけり　為村

同 池の水に宿るとなれば年をへて光をわたらん月かげ　雅経

同 萬代と月もおもはく契られしのみまつる神に祈る其て　雅家

同 ちづかあるみ山の影やあまたなる月かげの中にやかげしむらん　白川院

同 諸ともに君をぞすむべきよろづ代のあまてる月の萬代の秋　定頼

同 かはらぬはなにか月の光をば契りて見る月に棹さす　惠雅

拾 見るまれば山の端にかたぶく影を有りとへれど見るまじき　忠峯

代 大空にあかず見ゆる星のかずしげき夜は月のあかき見る人　美作

同 かりそめの世の中にて袖ぬれし夕暮をいかにかすぐしけん　後鳥羽院

同 秋もきてはかぜのをもてあきのはるけきさとにのみあらねど　とくまめ

同 夕ぐれはいかなる時ぞめにみえぬ風の音さへ哀なるらん　同

同 山里の夕ぐれごとのさびしさは峯の嵐のおとづれにして　経信

舩風
海路風

舟風

舟風寄夢

故郷風

風のたより

六 しきさ風寒くし吹かば足引の山より雲やかゝらん　読人不知
万 海原の風いたく吹らしからの舟釣する海士の浦つたふなり　家持
代 大宮人おもひのせしの吹よはに兜もかひらの泊をわくなる　定房
六 追風の吹ぬる時は行舟の帆手うちてこそうれしかりけれ　貫之
同 わたつ海のちぶりの神に手向する幣の追風やまずふかなん　同
万 わかの浦にさする白波いやましに立しきよせく海路やまず　家持
六 立かへりおなじみなとに吹風と波とはおもふどちにやあらん　経信
続 瀬つかもの宮まで吹くる風の音に夏をる秋もしられざりけり　後堂
万 采女の袖吹かへす明日香風都を遠みいたづらに吹く　志貴皇子
代 高にへの嵐の音もかはらねばいとさらくにさへぞなき　経信
古 花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる　友則
後拾 白ひきやなの花は東路のこちのこち風にそしるなる　康資王母
同 吹かへすすゝのうらにかたらせん舟のあとにつゞくとぞみる　益後母
新 別路はさ為のよそにそかゝるの風のたよりすぐ吹かな　行家

谷風

煙

夕煙

浦烟

海村煙

塩釜煙

遠煙

雲

代 山人の楽しむすゞ谷はおはらくにそよぐ風の音ぞする　信実
千 霞す立室のやしまの煙かはいかにたてどもねをなしてなき　顕方
新 風にかふくゆの烟の空に消てゆくへもしらぬ我おもひかな　勤行
六 古またく煙ぞ立て大空の雲とみえすそと燃ぬる　読人不知
代 夕されば野にも山にも立煙なげきよりこそ燃えまさりけれ　黄根太
詞 次ぐの浦にやく塩がまの煙こそ春にしられぬ霞なりけれ　俊頼
新 いかにせん室やの煙ともならぬ人めもしらぬ塩がまの浦　皇后宮
六 そらしらぬ煙のたくひなけれどもみえざらむ心の浦とならまし　貫之
新 須磨の海士の衣なほさらくもそらで塩焼く煙ぞたつる日ぞなき　読人不知
万 志賀の海士の塩焼く煙風をいたみ立ちは上らず山にたなびく　読人不知
新 立のぼる塩やの煙浦風になびくを人の心ともがな　貫之
代 みさごゐる荒磯の海やさびしくも塩やく煙なびくかたこゆ　匡大臣
同 名取る遠山本の松の葉の煙は立に迷ふそよ　定之
千 山里に煙引いわく夕暮に煙のうみなかるらん　蓮性
秋上五
覚蓮

巖上雲
夕雲
落葉雲
夕山雲
紅葉雲
海上雲
雷

雨
涼山雨
山寺雨

古堤雨

蕭蕭雨
種雨

雨中待客
曉

朝

寥海鈴
夕
夕幽思
夜

自ら地山峯小梅しら白雲たなびきこしぬ梅の香あり
野　夕雲八雲たなびきさえわたる海上の雲
代　あかつきもれでいとど初秋の風の吹く村人と
同　あかつきの波小風さりぎこゆまきこえ小ちる村雲
万　さる波のあかつきこゆる雲みたれだ雨ぞ降るちこえたこだせ
同　大海小鳥と知らぬくく小海原のくゆこえ波小たたる
同　雲をとおりよりあわしく時雨と久小塩ってゆくこえ
同　時雨とちぐとしてさしぬらん雨ちぐやぬぐとまし
同　ちねさちぬ雨ぞ降るちぐつれ雲あくづ小かせちぬれて
同　いとひのおられ秋ぞびもの雨の雨すこさめそ降る
同　夕ぬれ雨の降日とぞひとりぬぐさえぬぐせちる雨
後拾　遠山こゆる久しくとも雨のうきくちもとふぐちる
代　白雲のおりあるうえ雨ぐるうん雨しみ山の秋ぐ小
万　苦しくと降る雨ちこさぬの濡ら小家しぬらあくく小

経家
ぬぐとぬ
長方
雅経
人後
同
寄物
後人小和
寄物主
ふ志後人
家持
恵美
孫子
世慶

後拾　恋しくば長雨と人を見ぬきぬ小見ぬ雨ぞ降る
万　石上ふる雨小さうちぬ降小ちぬ山ぬ
代　袖ぬ小夕風ぬ雨ぬ降ぬ雨ぬ
六　雨ぬふる雨ぬ山ぬ秋の雨ぬ山ぬ
後　人をまつあくまぐぬ小ぬ山ぬ
拾　雖れぬまぐうれぬ夢のやぬ雨ぬ
同　さ雨小雨ぬうれぬくきぬ雨ぬ
代　涼さぬ小まぐ雨ぬ雨ぬ雨ぬ
万　秋萩小ちる白露小ぬ雨ぬ
後　二ぬ雨山峯小秋日のうぬ雨ぬ
代　とまちする一ぬの雨ぬ雨ぬ
後　夕ぐれ小雨波ぬぐうれぬ雨ぬ
野　われ濡る秋の雨ぬ雨ぬ雨ぬ
千　さぬ夕ぐれの雨ぬ雨ぬ雨ぬ

雨遠
海見
秋素
小和後人
輔以
赤染
鎌倉右
信実
人後
雅経
後白河後
り雨
信実
大炊御門右

庚申夜待暁

地議

山

代 神〇おうこそる秋とは地とあれゆぐこの元代光とも　小弁
万 いさかとうはやしふする郭まやしふする〇そもろ　ふ玉読人
うみとしかいひそやまへんすも　せとうう
同 せれこしふくでゆむくるいとれこしそゆるをやとれそもつくこん　同
代 つたれ系神れふ名れ松せふうのゆる光れあらくしる波　後系拾
万 よきんのらとようこそよとしいも　古地能みよ能人よ云ろ　玉葉
同 鳴神の名れをいしく光白のひそこの山名くこうるよ　よ美人及
同 古人のことりしねを象こそもよ　同
同 うの〇せこるみしこみ元をこいはきこぐら棚しすのと　同
同 大名ひちすれ山神の紙しくしくしくれ　同
同 遠つ人松しさよ地蒙ごひよひれしりまとをる山の名　懐古
同 名ふきこれふくまいこずさよ姫ごひれしりまとを君まろ山三角王
同 こしりろのをこしるみふるしごれ光白山つぎてをこしき　後人今和
古 浦を住る神うこんで紙波ゆる山の名ふ名ふそ名名る　美〇
後 あらむれ年を波こそ君ごとふ海れむ君の絶ねしる山　不知後人

年六れどしの白山をふそりをくの名れゆきこをり波　武見
同 よふふれどふと紙そりすどう山前れとふ名るを名年　角宮女房
同 ふくふるのあるとしふれすどう山こえてこれ　御製
同 君八りえ秋ふこそ吹まど山よ波人君とうきこ　文補
十 すどうまこやふ武代の神と君名駿ふまる山の名ぞこん　永範
同 吹れと君ごの枝ごこ名ふき〇ど山八ふしき名ぞきこゆる　紫式部
初 白をの九をふろ名罪ゆれ大内山といふゆを名名ふ　蓮舟
同 る名の人ふをゆ名白波のゆよりこゆる来のまろ山　寄補
同 うきこそふ山ゆをまず名君のくよにもりぬしのをろ山　信実
同 前ふ名ふりをゆる白山の名をれ君八きゆるまふ　信実
六 いつろうをこの名れ孫中ん紀ひま山の君れきこえぬ　ふ名読人
同 君ふ名山のふろ八をふ〇だ未来ふきこ家ひんとぞふ　同
代 大名とかきふれんで後ふうきみれのみえとこえす後　同防内侍
同 ふかうそれ色ふずと後山年一ぬる分のかどへえゆん　下野

源山

遠山

巖

名石山

代 立明の月さやかなる山のふもとにひとめいろふるるか　義孝
同 すみとりてそなぬぎてゆくとかんの山のわかくさをみで過られん　さねさ
同 ゆとをぐきこ吉野の中山昔より名のたつなれ今の世の人　ひとみ
同 鏡山ゆるとそをるる影ふかきうたかたよりかのとかりなる　恵慶
同 分けうきさをあぐさむるこゑかすまし吉野の山はよかるず雲遠し　遍
野 たゆたはせで程山ゆくくるとうたのようねかるとあり　
同 奥山のおどろのしたはゆみくてなるをせどと人めしもん　太上天皇
六 いつ計あそてくらのふるれでいつと入ぬる人まどつる森　ふかぬ法人
後撰 たつ雲のうへからとゆる是しのしたるのとみさかるまん　紫因
男 ゆくゑ落くめるてごがいまうんみちの雲ふるるとは　博通
同 大名むらすれとものいまうんきの雲はいくよ　生石
金 家とは雲とはの落うとはひうんとはね雲とは社とねんうら　行宗
野 寂寞の苔の岩戸とたづるまふ波の音のたるねのそあき　日蓮
男 人ものでは毋ぐまれるで程とはきの川はづのいりとせれる　ふみ人

松山

岩

岩石

山面

森

野亭

壁

京

園

代 遠近たちぬ見ぬ世の人を松山波のかけこそ恋しかりけり　俊平
同 松山のまきこれもいもぐれ枝さきみをのれぞちきこ名ハ雲らはず　詠雲文
古 光あきこ岩ふたまとよそ命あれで咲てとくちる花ひとあり　
後 世は中ふかちんぬこふ分命とくとくいそぐ　ふかぬ法人
六 ふ雲の岩ふるれる家花ひちるるとよ明　
男 大雲の三笠山の峯ふせる細谷河のおとのさやけさ　
代 人の住さとのくるきふ波のうちの赤れ船のをとなり　行宗
同 君ハ花秋を名残とさそうれて人を色よる衣ぶれもを　馬内侍
同 うの山くるる人命うらせで背みしく秋のことをいそぐ　夜雲文
野 ちくしふとはるる世べをあれで色名形しむ人でいうえぬ　袁盛
結 埋寞の長達ゴ京は黒づうう思ふれらとはいを謀う　
六 名ふ一ちでいづれと形て弱かく拾ておおせうかねぶ　信方
代 涙風の吹わぶの小世の滅茅京命ふる浦小玉で数ふる　国信
後 芦やこの紅とゆるしふてちるとせちらぬと逢坂の関　禅丸

独行関路
驛　うまや
又
行路
山路
夜山路

後拾
旅すがらそでひ立かし東路にをなる袖はぼうらの関　実方

千
逢坂の関にも人をかちとらも岩まのあれはかりまなせく　宗付

勅
もも秋の空ゆく雁もとどまらで跡をつきの関ならし　八兵衛

千
越えそりなやまらん相坂のせきもりしらでの影さかんなぞ　宗康

六
東路のうまやく数へてもわかかの家にふかくなからしさ　よみ人しらず

同
東路の里の遠さにゆられゆくからうまやくとまがはまつらに　同

後
さかれ山みゆる絵のしせらがれの千代にゆる旅ちかへ見ゆ　行平

竹
みる見えの関さかのみぞ見えけるかもへ人にゆるさねへかへなる　業経

六
いかのへの北中たぬかくむそめへかれて北中たぬ　種原のまこ

金
大江山くはの道乃遠ければまだふみもみず天の橋立　小式部

六
行きかねやゆくぞ秋の北のへ子の里にわうしとふなを　業平

方
青柳のちぐさとえのまた井にぞ君がおくらせ色てきは　人麿

拾
人しれずこゆと思ひし足引の山下水に影を見えつつ　紀之

後
此月の跡よりおそくいでぬれど先にぞ山は越つる　兼世八

六
くらぶ山くらしと君にたち出でてれどく嬉しとひとくよ　読人しらず

同
をしの宗さきけされば白まちのくてらり夜みちへゆき越ん　大浦

勅
嫌ひらとりが夜路の衣の露されし夜をぞすみぞ篠にかかる　よみ人しらず

竹
やどとりて行く先の旅にうちそ寝りゆきてならはぬかがみの露　隆房

六
吉北山こそまたぬれ袖のかえてまつらねかたの夜路の枠　顕り

拾
志かりてりまし物をいひつ山きまり越ふくたと知らず　よみ人しらず

同
境さそる袖いりの旅人や浜名の橋と名付そめけん　兼盛

後拾
葛まよちとゆるおもの橋の浅さのとぎに乃夜　清正

同
橋柱あつらえましかばおもかげのを浜てとききのおどろえまし　兼任

千
八えしの浪にゆきとまるかなこに浪のきみかへとおもと　兼因

同
行るのよそらりぬる世の中に昔あつらの橋でうから　道命

拾
橋の板に苔むす計未ならぬよくねらんせたのせ橋　道房

読
此渡るかずらの橋は夜殺て朽せぬ名のことまるをなら　兼亀

代
おもひつかるにまたいかにしてこゝし初らん鶴のつ　加賀

太閤

天橋立

水

代 よさの海の内かの海をうらさびてよせくるなみもたちぞ
好忠
新 年ふれどかくしもまされ松枝をうゝもるかぜのをとぞ
忠岑
同 玉ぢのかぐらの浪かあとをいたみたちとゞまりぬ
友則
同 おもかるるかぐらの松をさそふなれば夢のゐ葉かあきぞ
後拾 後冷大
代 海はなやをちかた遠ぎ波ゆゑにたゝぬ
順
同 逢坂かぬ波ゝ見わたすよさの海の浦かよりをるわまの松ぶね
くらのよ
同 きてみよと友だちかはまをゝ山ゝかまくるかまのたゝぎて
殺生
秋雪の名ぐひるかまの松をいふなひまかへるをゝ
上東門院
新 落激つを井あのきよられぬ波ゝかいりぬとぬを
後拾 後人ふか
古 いかゝの北中代清ゆるれどもの名知人ぞ
同
後拾 逢坂の関といきるを井のあ代をたゝ
堀川太
詞 菅ゝ山ゝ井のあかるゝ波ゝ松ぶね年代へる
後拾
新 うゝ山ゝずゝ山ゝあの底をとゝ清きかた月ぞ
黄泉
同 おゝらかき能井のあとを踏びとてかの藤代すぎつるかな
上東門院

伝 三吉北の大海のあれゆれひろかかとかの
代 ろつせ世の神とぞ見ゝ三吉北の激のみかるの波のゆゝ
同 はまおとぞ見ぞ〜宗〇かよせくるぞかすきむ若れかな
後拾 菅北川をゝ村雨ゝ〜宗まかゝ激つかとやをまれ
伝 かりぐゝ木れりぐれ流れずをうゝ花をとみまく
後拾 吉野川をき入て落す激つをかゝ人のゝ名のえをとするかな
後拾 せを入る名れ松ぶれをとまるを強ずゝ激の糸ゝ
新 激つせかゝ人の代ゝるゝのゝ
拾 松のゝゝ出る名れ名れぶれをかぶきを強ゝとぞ
同 松代のゝ名能と名ゝかゝ
新 りのゝ六八十字浦川のゝ名ぶれ波のゝ人ぞ
同 いせの海代神つ白波花かゝ名ぶをみて妹ゝ名ぶをかぶをかゝ
安貴王
同 あゝ川ゝ波立ぬ吉白のゆゝ名ぶをゝ名ぶをゝ
流人ふか
同 名ぶぐゝきいゝ名みの海代神代波ちゝかゝとぬやまと名ぬ
ひとまろ

とみ波代
後拾 波吉羽流
貫之
基俊
重輔
いせ
重頼
後朱雀院
貫之
日
人麿
安貴王
流人ふか
ひとまろ

後拾 ちるとみえて池かうれどたまるぬを蓮の葉水ぞ玉なる　読人しらず
後拾 ながれたるもうに拍ぞ絶えのいぬ波うゝづこそあるき　為忠
代 大うこと人のゝわすう川きの上ちふかぐ波ぞ生川　西園寺公経
同 三蓮花の山代風ふうゝ姉せの川ゝ浪ゝゝみゆ　いせ
万 泊瀬川あぐるみをの瀬をゝみねでこそ波の立ちさゝ　人麿
同 泊瀬の長谷の杉ぐ折おきうゝよりくる波のたゝのさゝ　長皇子
後拾 泊瀬の浦ぜいてく吹ぬゝ岸打波の交ゝきる　在世
万 大海え神かゝませだ海末の立わたる山井小海をかす　人麿
後拾 多ゝ多ぐ嵐よ吹ぬんろまこれ泊ぶ白いの袖ぶふ　花永
続 高羽川ちさ入ぬ岩の泊ゝゝ人のゝをみえるりのを　仁和寺二宮母
古 籠海の泊ゝちゝかるぐるがむしてぐかぐあゝひふ　業平
野 泊ゝ世ぶ世ぶくすみぬれで泊のむすゝ世ゝえゝ　大輔
古 ゝ為世ぶ世ぶくすみぬれで泊のむすゝ世ゝえゝ　ふゐ読人
万 ちゝ為世ぶ世ぶくすみぬれで泊のむすゝ世ゝえゝ　金村

泊瀬川
泊瀬
沼瀬
瀬

同 初瀬女の瀬るゝ岩ぶ小波ぞ立ぞ　同
同 ゝ立ぞ小岩瀬つ滝の白内いれどいるぬゝ　同　神選
古 清瀬のせゝの白糸ちゝ世ゝ長谷ぞ　紀友
同 ゝ白ちゝす瀬のゝ白むゝ長谷ぞ　紀友
同 風ふゝどぬゝさゝぬ白ゝ世ゝ長谷ぞ　紀友
同 波岩ゝ引てさゝ世る布ゝ世ゝ長谷ぞ　紀均
同 ぬゝ入る人ゝ世ゝ白むゝのまれゝ世ゝ長谷ぞ　業平
同 岩瀬つ滝のゝ白むゝ世ゝ長谷ぞ　忠岑
後 岩ぶ瀬ぶ白ぶ岩ぶ小おひぞ白ゝ世ゝ長谷ぞ　信皇
同 と立ぶ小我ゝ世ゝ長谷ぞ　遍昭
同 瀬ぶ世ぶ小ゝ白ゝ世ゝ長谷ぞ　人麿
拾 岩小ぶ立ぶ瀬ぶ白ぶ世ゝ長谷ぞ　同
詞 岩井よりつゝぬゝ白むゝ世ゝ長谷ぞ　俊重
十 ぬゝ白ゝ世ゝ長谷ぞ　長能

新 久方の天津乙女が夏衣雲井にさらす布引の滝　有家
同 みなかみは空に見ゆるは白雲のたつにまがへる布引の滝　内大臣
六 足引の山ゐにしるくどまどはれず春羽は滝の音にはやき　左近人従
同 いかにして数を知らまし落滝つ滝のみなかみより落つる白玉　同
代 立帰りいくらの森は幾歳もみれどもあかぬ布引の滝　久我太政
同 思ふにはゆかまほしきに清滝の滝つ波の落つるなるべし　いつ侯ぬ
同 滝つせに夏をわすれて衣袖の涙に似つつ落つる白玉　貫之
万 古へゆ人のいひくる老人のをちつといふぞ名におふ滝のせ　東人
六 石菊の花のかざしをうつしては春やかはらぬ白たえのたき　津白伎
代 あひとつのうくある滝を見れど又にえぬぬもの流るる　道綱母
金 玉は何色やすだれの求めけん雲より落る布引の滝　不知読人
代 さらしけんひとも見えなき山人の尋てきつる布引の滝　京極関白
金 白雲とよそにみつれど足引の山もとどろに落つる滝つせ　経信
十 志もとにまがひもやまず菅生山落くる滝の音にまかせだ　経忠

滝糸

滝水乱糸

ち股の滝

龍門滝

布引滝

温泉

湖

拾 見がくる岩に張せぬ滝なればいとも窓でみまほしき枝にぞかかる　伊勢
同 なかれくる滝の白糸絶ずしていくらの玉の緒とかなるらん　躬恒
後拾 とる人もあまた寄る山の滝の糸も乱のこころ中でかせるらん　定頼
六 糸とのみ見えて流るる滝なればたゆくともひらずぬける白玉　貫之
拾 流れくる滝の糸こそよわからしぬけど乱れて落つる白玉　同
同 わか恋のこくとにやかかるらんよる人もなき滝の白糸　不知読人
後 いつのまにふり積るらん三芳野の山のかひよりくだれ落る雪　昇
古 たちぬはぬ衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらん　伊勢
十 春ふのとかしい千々の数あらそふよりも白き布引の滝　良清
同 みなかみの岩ね白雲と見ゆるは波さらしたる布引の滝　六条右
勅 布引の滝の白糸わくらばにとひくる人もいくよへぬらん　為家
後拾 いづる湯のこくにかかれる白糸はくる人絶ぬ機にぞかかれる　重之
千 恋しくは草を三の秋あらぬともおもへ出湯なるべし　頼実
万 家づくるをぎもあがるる佑滝川にゆるとわくぞ文もまれみん　赤人

万 元仁
人麿
金 材
森 五
人麿
万 ちはやぶる神の御代にかけてはかくれどもいかるるものとかはらぬ
同 それどころぬ吉野の川乃とこれぬ不絶ることなく又ゆくすえ
同 三笠山の御ゆきの川の第代不絶るものなくまさきゆくすえ
同 古人のうたこの人の拾ひ集めたる歌ども第代のものとかはらぬ
同 我ひとを妹がよもすがらもてゆくで川又ゆくすえ第代まで不
裕 名ぶかえいにて見くるとそえずるる川さすがに流るるかはねるの
金 さやくよりれみ流りて紅の川ちりてとまるを見ぬ
野 立ゆりそいみまくのかはきぶみとすそ川のせでせく浪
同 宣方名ぶかえ出てれども花の川ゆく流りてせ不社名れ
六 就いうしぶかゆるぬいとかはー浪のさびしさ代のとう
万 ひぐらしのなくかはらぬいとかはー浪のさびしさ代のとう
同 ぬばたまのゆるきらんれども白の川とそうとき流れとき
代 小松ふるとそ流ゆるしわかるー川と青ゆくぬ流るこ
野 若ぶ代ふかあふこまりの名法みとせ代人法すまんとそ
万 人麿

河内流法

川迄舟

堰

堰水

瀬

野 年ゆくるうちにてしることせうん武世不朱ぬあのみあるみ
六 いでそれるあちこの買れすぐ川ぶれそうんあやぶるせ
代 世ゆくとし後すをもまん者ち流えしきさなの川あ
金 世流るみくらーあのあ法みをあの仏代えをえ
野 乃川やせみのかりの法れで月ト流代ぶでせす
万 うちりを法せるくーあぶ人舟ぶ船の遠をせ少
同 知家かきをるくいぶ川船清くうくえ舟人
和 法みををきの夫ふをの世代ぶみあでーす波の名社船ぶ
万 ををせ川ぶるみをの世代ぶみあでーす波の名社船ぶ
後拾 年ごふせくとハすれど人井河むをの名社船ぶ
六 井をきあてさいぶうをの業ふ長くるあの業ふえ
万 古人ドくちてやぬひんぶ代古川の法き郷のとぶ
同 長屋のぶーの武代寅こりぶれあくーぶ川のせイ
六 名ぶ川いくせう法るせをとやせとりうぶ法れで

法横
法人ふね
宣家
國生
長四
ふ志法人
家持
貞法
法人ふ
長法
法人ふね
同
間人宿禁
不志法人

迅瀧
如ち
海

六 荒こずへ波わらせんこの海のせせらぎ
万 もゝづたへ行てみてゞ仰ぐ月の澄て流れ
同 あさ霧小清水ゝ
同 大とものみなの浦ゞをおさへ
同 大海の波のよりくゆすり立波のよらんと
後 笑咲てみ命の数抱へてつゝむ
新 清えぐ月八はれ
同 沖つ風吹たゝ小ゝ
万 ますらをのさらやぎ
同 漕きよみ浦るつみ仰
同 ふゞもよゝ赤ひもを結
同 紅の岸に打てえおさ
同 あ一(ホ)ゝ
同 紅代の岸の松原遠つ神

嘆海
海境
海邊

ゝ人及
同
同
同
同
小町
亀屋
定家
舎人親子
流人子和
同
同
若菜座主
角兄ノ名

古 紅葉と紅ハ色ぐ
勅 すゝ
月 紅葉ときこゝ
続 小松ゝ
六 海ゝ
代 すぎつる
古 紅の松風秋風
同 紅波ゝ
後拾 色ゝ
六 いざゝ
万 約
代 夕され
万 大海ゝ
同 沖の海

海道典
海道名
海道夕
海路

忠峯
一條右
宋仲
肥後
ゝみ人及
國信
美濃
重之
元命
大伴卿
ふゝ流人
人まろ
藤原之
大別皮

海路雲　　藤政
海路山　　政村
海路月暮　　保季
海路紅　　読人しらず
海路遠　　紀貫之
海路思不　　通俊

水路　　国基
海村　　読人しらず
濱　　同
濱砂　　晩秋
濱浪　　牡鹿
磯浪　　宗城
島　　小野
　　敦忠

千代　たゆたくとたちの泊を漕ゆくに岸に松ある遠さかるこ
代　いくかのゆの湊に泊つすか橋をむそよする浦人
同　紅に海々しかそとる波るようとたくもる月紅
万　名だくひとねのさきを漕こめぐやまと紅くなるが
同　まゆしとを見るかみゆるあの山をそ漕舟泊しさいなく
後拾　あかし吹せとの塩ひかは舟出してあくそ色るさくらこ山
代　紅出せしたくそくらこまかたちねしきれこそ
万　波をしいかは橋をかるのうき海やすぐよ松や漕給ま
同　紅ひきこ漕出て家いゆの寄浦すかは鹿成みてゆらこん
代　紅人のまちたぬくまを見み泊かはれてぬぬよよ
勅　紅をそ称浦の数うちんだ波ちの寄や松ゆすま
続　紅束とえねね舟泊の船まハ浦の舟おそいるこちする
万　名名のあとの湊を漕とて塩づすぐ浦とうちくら年
代　すれ泊かは紅ひきこて漕出て出浦の浦かは月出ちう

水路　　定家
海村　　好忠
濱　　紅梅
　　読人しらず
　　八束
　　読人しらず
　　紀貫之
　　敦忠
　　宗成
　　不知読人
　　建保の製
　　清原
　　恵人

同　塩江かたのうまとを大君のみ舟こかんとうてきりをせど
代　大井河まれのこゆきかは年一ぬる紅葉の舟泊とをそり
同　もしぶてて浦かたを塩やくんゆくん烟をとをえず紅紅
同　ひまだかく雑波のうすとかくこそ出のやしぶま
万　濱きよみ漕ゆづしみ神代ちうる舟のつる大ちて濱
同　松ちの清き濱ぬかみ見ばそきまさんち清きえまぐり
同　大津のみ山の濱ぐを打さうしよちる波のりしちぞと
古　紅までひぐき色こる石ぬい波のをすぐそ風ぞしる
勅　波よする吹との濱を濱風かは時しとそる名ぞれもれる
代　白波のをすれの葉ちうまさぬ吹きき浦ぞをれ
万　ものまぬちひをうち吹ちしあぐきのをの濱かは浪をちる
代　みさぬ名る荒波波かはるむれをとかをえををかとうぞ
六　風かはる浪の波かををるれをちえをちぬ荒のみぞさく
万　ちぞたを山打ちえをみを世べ釜雑の名ちぐちる梢ちしかは舟

万　ゆくまるんどあずいかれて色もそ行んこぬ人のつめ　後人云
同　ことわりがあるてのうこせま恨もとくげたく為浪まよりこゆ　同
古　はるぎこまこうのの小為の人ぞ知のたとかいざといえまを　同
同　てるぶ海のぞしかさせる名ぬの浪もとゆるわたぢ為ゆ　同
代　うき為と名ふきてこれど浪せをかれとさんぶ世をぞ〳〵ふる　ちのね
万　爰ちうまの時を浪為みをてゆん高きものを　ふ知後人
古　為ふよりてみのく為せを為ふこれぬ拍ふぞ名ふる　栗之
同　てこの名よせる波のちぞくとみまてかきまぶまと　後人ふ知
後拾　あふいちぞあぶふぞふぞふをうん為波のぬれ衣いくせきろうん　同
拾　てぶうの浪ふとぬれ拾浪為まふ名のあて来のまを　ちのく
万　いをみ船に行をぬしを為ゆ日為をうふ浪をてるこゆ　ふ知後人
同　まさ記くて又ゆうみんまをうをのをふ来をもる鶴の浦まを　同
古　浦奥をいぶくいあれど拾為の浦ぶ母のをあぞれをを　同
後拾　為せるりかの煙張せるぶをありるき次をの浦ふ　後圓

千　行年に為みとたれゆうをうんちりぶうせぬ和のうをうん　宋伊
代　ぶきする名ぶちの浦を登人を浪のぬれ衣いくよきろう年　拾遺
万　てうる為浪せをとゆ為のいをもぶをかぶの為せぬ　士業人云
新　ゆうぶあうゆうゆうぶうをすかの波をかきてぶをいくゆ　万葉
万　我余をまきくあうぶ又をみんちぶの大津ふよする名波　穂積老
同　ふせの浦をきまん名波をぶよひをとをふみてーぬぶん　家持
同　いざまどをたをつぶ為をゆあちの四ぶり国ぶ大和為称を　ふ知後人
同　為為を大和の国をことだまの為する国ぶまを知んてろ　同
同　月うんぶをあぶ国あうふをを為ぶを為ぶをきうん　池主
代　世ぶうををふぶ遠ーを為を中を国をうあうふをの為　為家
同　光をぶむうーのをふゆうぶ祥を国をを宮めをーん　古御門院
同　樺うりをぶうををみをーぶれいをぶ為をとをーを為をぶ　ひ任
ふ　和為をあるひひを郡のをねををふ為をぶ為を為をうん　後人ふ知
万　をを波の国をみ神のうををぶを為をうを知みれぶ為をを　黒人

名所都

禁中

雅所

稱居

万 青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふがごとくいまさかりなり

同 小野らがうみとくくとかせのこの時乃ゆるんで船とあらぬ

同 船ふかくそえれ小ゆとあらぬ

同 人皇きこ山こ皇こうんだ百世水とそ皇ごうぬ大皇どころ

同 大君之神ハ ませば 高ごまのはつ田を船とあつた

同 おそ君ハ神ハ ませば 高ごまの さつ ぐ ねまを都となつ

代 命ふそうんうんうんん書ふきくかつの船をそつうんだ

万 吳川ゆくせのあ川線ごこそ大皇どころ稱ろひゆる先

同 みゐ氏系ふの部ハ嚴ものうう大皇人のうう誘ひぬまだ

同 君くあ川そ吳の川ゆ皇線ずはくんまうん大皇どころ

拾 石ゆふみとせのゆ川そうんど久の君ひこめづ一せふ

ハ ふんどれとせまぬ百きせみざんこのゆう船ひき

古 ゆとのいうどいと久ろうさ記ます久ろどよろべふ長ばくせり

同 わすゐ川潮ふとゆうゐ我君とせふゐ船ふで君久ふ

小地者 同 旅人 ふ知読人 戒覚ハ 同 若意 好古 い世 読人ふ知 いを

新室 庭 垣井 講

万 ものと記ひあ手のうう ふたいうゐる書ふうかんとす年

拾 君すゐ手ふ ごゐるゐとれうう久を行ひ ごとりてゐる

同 君ゐ ぐる 潮のゐ系 絶せ で ぞ久 ふ ふ ゐ ゐ ゐ ゐ

同 ふと ぞふ 読 ゐ ゆる 流ゐの ふ ゆ て す ま ん 新 ぞ ゆ ま

同 蔵 稼る 庭 ぞ ぞふ と そ ゐる 垣ふ む ま を

ハ ふ人 ん と ゐ せ ど ハ を 蔵 を ひ る 庭ふ む ま を

古 や と ゐ い ぞ と ハ を 垣 蔵 ご ゐ ふ や ゆ き ひ る そ の 垣 垣 代

万 ゐ ゐ ゐ す 業 ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ

古 我門の板井ハ ゐ 墨 遠 ゐ 人 ゐ ま ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ

後拾 君人のゐ む ゐ ふ と ハ ゐ ゐ ゐ ゐ 我 ゐ の 岩井ハ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ

ハ ゐ と の み ゐ ふ ゐ ゐ ゐ ゐ ど 我 ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ

同 垣 ど ゐ ふ ゐ ん ど ゐ ゐ ゐ 我 ゐ の 岩井の ゐ ゐ ぬ ま ど ら ゐ ゐ

同 梅 花 垣 て 我 の み ゐ ん と ゐ た 濃 ゐ ら き ハ 人 ゐ ゐ る と ど

同 ゐ ゐ ん ど ゐ ゐ ん と ゐ ゐ ゐ ふ ど 我 ハ 岩 ふ ど 俳 ど ゐ る

体ふ 小大夫 後拾 新永 源重ハ 人ふ 同 同 同 新意 い世 同 読人ふ知 同

里

山畝
山里

市

遠村
遠郷

万 [illegible]
同 おもき海ひろ[illegible]
同 [illegible]
古 [illegible]
後拾 [illegible]
代 [illegible]
古 [illegible]
後拾 [illegible]
代 [illegible]
同 [illegible]
代 [illegible]
同 [illegible]

[illegible]

万 [illegible]
同 [illegible]

[illegible]

宗待
石川郎女
後人古和
同
後撰
正歌
[illegible]
続宣
流人古
[illegible]
後撰
人麿
[illegible]
同
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

古宮
故郷

代 [illegible]
万 [illegible]
同 [illegible]
同 [illegible]
同 [illegible]
同 [illegible]
同 [illegible]
古 [illegible]
同 [illegible]
後 [illegible]
同 [illegible]
拾 [illegible]
新 [illegible]
同 [illegible]

[illegible]
人麿
黒人
同
旅人
人麿
詠人古和
同
同
[illegible]
[illegible]
慶運
[illegible]

右に同
故郷荒
水に
堀風
仙家

流人ふる
縁因ハ
清輔
秋
深光・
業平
ふる流人
惟方
秀紙
城芋
色出ハ
清輔
縁因ハ
業平

雨雲
雨居木
雨居菅源
雨居水芳
雨中
雨中燒
幽居
幽居家来
深山幽居

草庵

幽栖

家

隠家

古寺

代 世をいとふこゝろは峰にある物は浮世をそむく家居なりけり　戒暹△

千 旅よりは苔の衣のうしとおもふわれもしらしな谷の庵に　安圓

代 あはれてて世をのがれむとおもへずはすみうかるべき草の庵か　宗倉

同 みづからや家すみてこそおもひしれ人のたよりにとはるゝなら　忠房

同 山里は何ゆゑんとなく絶えずなしまさせぬ人の何ゆゑむらん　舜蓮△

万 いつはりの世にある事もあはれなる家は万代まてけり　藤原武城

同 かく落花かれさるぶは草木まで絶ゆる事はあるまじかね　元正内親王

古 と文よとふ宿きく人も言ひえずや人影して門さへさしてつ　読人しらず

代 くだらの小野の草の葉しげりあひ思ひをとふ人　大山門院

同 とふ人はあとはえこそいひけれ我やはかれしと思ひつゝ　凌雲

同 ふるさとは人のとふこそうれしけれあと知るまで我身なりけむ　良寛△

新 世をのがれ山の霞にねまちする暁おきの暮涼の秋　小侍従

代 昔思ふ古寺の山はふりて暁たくするる月かげ　和泉

新 ちらし残る寺の苔の下にのこる行く人影なし　蓮敏△

万 月よし川音きよしいざこゝに行かむ世の中に捨てゆかん　四郎

同 わが心の草はなく世のおもひするみあすつらかなむ　よみ人しらず

古 やまとの草のかはりてつらきよりめでてやかんとぞ思ふ　友則

同 おかれてふことは家にてわらなくに今はみて流るらん　貫之

同 つれなれどわかくてまつ秋よりまねぬ先に何かはまし　みつね

同 いでむかし人の涙をねまに秋の時節と身ぞもなる　藤原定家

後 うき中なれやすきこよの中に露とものわるるそれぞえ見まし　よみ人しらず

同 こんといひてつれなき身にし花に知られぬなきはまして流　摂政太政

拾 おのがさへつみせるつれなき梅ぞいふぞの花に露涼まじまし　順

後拾 心はしらずして秋ぞいかにしても花のまへいかにまし　道長

同 り人にとまる花はいかにぞへんおもて涙の文はかれせ　赤染

同 迷ふなは雲井をこにふる花とよみね指はあらじせ　頼政

同 かの初のあとふなど思ふら川のせきとぞみね浪せよか　定頼

金 くるさへ見つるとて花おもべき身のうきをする丸　國信

寄社恋雑

詞　えゑくはゑきはおのゆきられいはかゝへ人がおもうくてゐん　くゞつなびき（傀儡靡イ）

千　立とらへいへ人も別しせんはわかるゝかゝみのこのえ　不知読人

同　恨わんかたこそなけれはかなき世に別しとはおもはざりしを　登蓮

新　恋するもよやそる袖もぬるゝ花も立みかくぞる秋の月かな　定家

続　おもかけのむかしはあはれしきかなくぞ人に逢ひけれ　能因

代　たへまなりともなかるゝ家ぞくら思ひ出せぬおもはする人　光俊

同　あらくと云ひとく社にかれも人やつゝみの恨おもひ辞　六条

同　我にわらぬ人の手向るぬさなれど私ぞかるとくされける　治部卿

方　かくれぬをそれぞこそ袖も恋しきを君が誠いかなる　よみ人しらず

同　春日野にいはくらみ宮の梅花得て思ますまでしらぬまで　清河

古　偲ふもとときはのまと崖ひとれかぞ恋しかるべし　ゆきさう

同　たまかづらときはふられん春まではぬれ衣きせし君はしらなん　読人不知

拾　思ひかねの咲ゐるまも我ぞ恋はまだ井出にかへりそ　忠

同　みる程なきをみるに心ぞおもひにつらぬる　読人不知

夏雑部

秋の上かれ

後拾　ゆきとやまに立ねるかすみをいはでとふらる夜半の花　選子内

後　ほにいでてこゑたてなくもやまのはのかぜのさむきにおとろかれぬる　よみ人不知

拾　思ふわかよ花漸にむかふる萬葉の秋風ふくぞと思はるらん　同

方　おくれぬをそれそこそあんいえ世の秋萩みさくいうへ子流　阿部大史

古　すぐる鴫秋は旅泉に立て旅行人をいはとりまくしき　読人不知

続拾　紅葉みん秋の秋しすくなまに君あがるせと給とかとほ　直実

金　秋虫の立分ねる君あまりそれねぬひにまどひぬるか　基俊

詞　思らん程なくて立ちで恋しきはよせも月の分なりけり　正経

新　おほかたはいつも歎の根せぬにいとゞ恋しき秋のゆふぐれ　隆家

同　とはるべきとはいれふはつにくらへどもいはまし秋はさびしきを　宮内方

同　秋風の露はやどりに君をおきて塵をはらふとぞ思ふ　一条院

同　天河君にきこえし身にしみて我ぞまさらぬなきは恋しき　加賀左衛門

身　待人をけしむ秋くぞ夜まし恋ぞふる秋風夕は　讃岐

冬部口のれ

千　たるおほよ寝る所に紅葉て日数も宮の峰ぞたえ　俊成

野 秋の月まちのみゆるかさとりてそゝぐらんかべにたう遊ん　一隆右
方 白たへの袖ならべるべき日をたゝしかゝむせびのみしかな　紀女家
古 たゝ君をうらみまさるあはれをいのちの長はんにはのごともせん　夢ゝ
同 おれて袖をぬらすとぶらうえあぐるふねて君さ　源去
野 君袖をぬれぬ袖ふかし蓮てたゝれたりうるを紅のり東の嶋　雅俊朝臣
古 限あるぐるぬ波ふそかもぬる袖をうかゝわうん日まぢふ　読人しらず
同 ゆくれの嶺なりてとえれるんるいおそと君うえく　通昭△
持 まそといでいとかりうて新ふ志ぐとをんを新て紀同
同 おそをいのうんわそでをうたゝゆ君や限あるをん　同
同 ゝうれをゝをハ雅をゝでめうんうすま袖とゝぢゝをゝん　同
同 ゝるをゝをゝしといをゝいをゝるゝゆの分を切ぐゝ花のゝを　同
後撰 物 ゝり 春ハ強ぐふまゝ子れどんハ君ゝが方ふゝをゝひけ　孝君
物 ゝゝぬ牛ゝゝ君ふ嶺くゝゝぢふ物すハけゝぐゝ花ゝをゝを　ゝを因△
ゝ ふ行人をゝしむとゝゝひゝう遠ゝ愛ゝぢを秋ハまゝどん　愛ゝ

かねくゝをれを物ゝ君

ふをゝゝしむ

遠別離

ゝ 限あるを井ゝをふふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝん　ゝゝん
後 君ゝの君ゝゝゝ乃里ハ行袖をあひゝの白ゝるけまゝかゝう　滋野女
同 を袖をゝゝゝゝぬ家ゝゝゝゝゝふゝゝゝ井ゝゝゝゝゝゝゝゝ　ふ知法人
拾 ゝゝる物ゝ袖ゝを君ゝふ袖ぬゝゝを行月のめぐゝゝあゝまで　夏韓
同 仲ゝを為を君ゝ峰をりゝゝをゝみゝゝゝんまぢゝゝゝゝゝか　肥前
後拾 いゝ牛ゝを行ゝゝゝゝゝ嶺ゝんゝ嶺をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝん
同 ゝゝ袖ゝを嶺ゝる袖のゝゝゝふ遠ゝるまんふをゝゝゝゝけ　春昭△
同 天川波ゝゝゝゝふはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝ任
物 君ゝゝゝゝ月まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝ
同 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝ△
後 ゝゝん袖をまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝ校正
ゝ 遠くゝ君をゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　政平
代 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　愛ゝ
同 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　下野
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　式ノ命婦

近歌雑

入唐

代 君があたりみなとをさしてさゝれ石の中にかくれて我ぞまちける　常光

同 かしこまるさきに波のうちよする文いはゞえとぞいはれける　西行△

古 名はあれどわすれがたみと思へども袖の露ぞま　やしさき

万 大舟にまかぢしゞぬき此あこを唐国へやるいはへ神たち　太后

同 舟のへにうしはきいましてまかぢぬきもそちゆらさず　直嶋

同 大伴のみつの松原かきはきて我まちたらんはやかへりませ　憶良

同 唐國に行たらはしてかへりこんますらたけ男にみきまつる　鷹主

千 思へども此世のほかのかへりこん行末のきえせぬかなの波こそあれ　寂昭△

新 ちるとしもまた此のもとにぞなきとぞ見えぬ日の月をわすれざらん　成尋母

同 はや舟さして行ぞまつくの袖にやつれし松浦の沖をわたる舟人　隆信

同 忘るなよ心の中のちぎりをもあはれいかにといつか日ぞあらん　智洸△

代 かねてよりわかれてのちもさきの日のさかりも文のはてに　詠人しらず

同 夏の内に別れて後もさきよの秋をさめてぞ文はわかるゝ　性空△

万 ちかくあらばかへりにだにもうちゆきて妹が手まくら指かへてねむ　大伴卿

送別

同 あすからは我はこひんな越入山岩ふみならし君が越いなば　読人しらず

同 うち日さす都の人につげまくは見し日のごとくありとつげこそ　山背王

同 ゆきめぐりあはんとぞおもふ秋萩の花をかざさね君がかへるさ　読人しらず

同 梓弓ひくとよ国のみ山をもこえてぞゆかんかへりこんまで　桜作益人

古 ますらをの行といふ道ぞおほろかにおもひて行なますらをのとも　聖武帝

同 君がゆくこしの白山しらねども雪のまにまにあとはたづねん　兼輔

同 白雲のやへにかさなるをちにてもおもはん人に心へだつな　貫之

同 雲井にもかよふ心のおくれねばわかると人にみゆばかりなり　深養父

同 思へども身をしわけねばめにみえぬ心を君にたぐへてぞやる　淳行

同 かへる山なにぞはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそありけれ　躬恒

同 よそにのみこひやわたらん白山のゆきみるべくもあらぬわが身は　同

後 君がゆくかたにありてふ波河まづは袖にぞながるべらなる　読人しらず

同 こんといふもをまちかねつるを秋まで風のまにまに　源大政

同 初雁の家にもなれる秋なれど君とはかけて旅のそらなん　読人しらず

ちと京へんをれくとゝ変たりるかむ　長人改
同　いで牧笛とり山ゝ月を動て　同
同　為てくだことだてとせんとるされ　同
同　こひやるゝ山中ハさてゝ　真鞍
同　ゆりたの里ゆゝ　旅人
拾　いくで牧家分ふくて光くまれ　らの
同　玄蕃ゝ焼をみるゝふ　ふ和旅人
同　月新ハあずみるを更林の山の梯ゝ　景之
同　ちむとゝ世まること社ゝゝ我衣をとりて社の　旅人ふ
同　ゆ海ハ為ゝ人のゝ　同
同　ゆゝをかゆゆねえゝの　同
同　家ゝゝ　三河
同　東海の景色ゝ人ゝ　山部
同　ちゝ光ゝゝ

同　ゝゝ
拾　わ山のまゝの浦風ゝよせ　同
同　いでちゝゝ月乃旅ゝ　同
同　こひむよゝをゝ　同
金　為ゝ人ゝ　同
銅　くれだまゝ　同
同　ゝゝさすゝ　同
同　立ゝ　同
同　ゆ海ゝ　同
千　為ゝ　同
同　別ゝ　同
同　ゝゝ　同
野　月新ゝ　同
物　為ゝ

長人改
定軍
軍歌
長海
あずま
甲斐
皇后宮
元歌
月を輝
軍歌
定家
日矢
三條殿
長人改

初　立てんをかりまたまつかどいちとせ成立すらちせんを　経頼
同　仮初代ふとをしべどそうくまれ海つふ程へんとぞくやーき　清正
六　きみが行とうつときけど月みてもいざ接ふで来るべき　業平
同　えてこ所とわるねんをむだこのうちたくをそ人のりいら　同
同　くう衣さも涙ふそがちはくちゃひぬ袋くやちゃゆるる　在人
月　ふふ所ちてふのおくれるで獨行ことおもしぐちあん　茶伊
同　とぞーるん考しも君ぐるをしむわまさて若ふ社をえん　三河内侍
万　ちまえいかば妹大まが形りもそり稚代ちのゆづるふドがを　ふ知読人
同　ちそふのみ君をおそゆだみをむさしをあすう越ん　同
古　ーをして泣うし星を出そい前どいそ海来北とも流れん　業平
同　ゆふずーてひるを神の白玉を君が飲みとはこそそり　在人
同　直ちえいあどせの峰ふあるまつとーきそ今ゆちえん　行平
同　人ちせ石あれくふ大ちえんきうといひそいざ海ちん　さね
後　りさ花をちゃね涙せえ別ーきへ来ぐられふ落るせちう　ちる

同　ちふがとことふむすびそちうれたれうんまでもたひ乱れ　業平
同　袖とちの代ひと程みしー君ふ来て涙れるふねれ泣そり　在海
後拾　ときまるべきを泣ふそあ千ーふ逢ぐちうえ八ちうる　正言
同　有泣の花の程ふ泣てひそやを立とーて出を（そり　通俊
金　さし光る程ロふ君を出んかうぐ月ちうれをちるれ　り兼
同　えしーん人を独家分ふそちひだちえれぬ程を涙ちうを　清胤
翻　ちうちあを立ふ君ふとぐら来て我さーちれふーつを（ねるふら　在命
千　詰花ふり人ーあきふ涙ぐちうでとまちさをちる　覚敏
同　ん出て君ふを岩ふとあ来て涙と出をふ出る紅のれ　在原
同　妹ちひてちふり程のちちをーふ程ちちすーきる程　在業
野　ゆちちん程をちく人ふ出ちーま出ぐれぬ袋き我分来せで　在衡
同　ふ誘ハちれを限の紅ちん文ふ人ぐ袋きんちちうせひ　西行
同　出のあちうん君ちんを厳むと涙ちんことハいをとあくとト　同
同　さを花と程逢ことを程むれちぐのちぐをえぬふを　同

いのりてあふ恋

忘れて恨る

月 かどをむかへ松の月がふくおぼつかなきさへとのまいりまうで 因信△

同 ゆふこん祝ひふてふかくわかみのめぐりまうらねは逢なりぬをと 恵園△

万 同詣ある宮居に絶えん日へ手向よくせとおもふきもある 若六呂

同 ゆふ凍の海のそれねきまつりいそぎそん呼ゆうまゆ面がわかせず 文?人次

同 むほうの在の神つちまひそせんゆかりの君は逢ふてみせよ 池主

同 衍が見にゆくくそふかが神なりと祈とよくせし身え呼ぶん 文語古人

枯 庭中のわすれの神に小紫しゆれそいそん呼ゆくまでに 諸人

六 体くらね契むすべるとぞいは手向の神ぞつくせぶらわが ちのよ

後 むかしの手向の神も我ごとく家にへてと法もりへそぞ思ふよ 貫之

枯 君が世の流るる都にわえてう定まよはらこがひも形く いせ

後 きこが世と長月とぞかえばそいへのの形のほし 如貎

詞 宮びくはよのとまに君ぞみん末の松よりいきての松まで さとみ

後枯 よろこびとふちへていそぐ結あれどもとも見秋とぞわからるれ やくよう

村 我る世と祈らね君が世はあれど祝ひまする宮の実 家通

逢別

水邊別

代 後れじとえるままに身をさ逢はむ君がふとせぞいの見ぬるに 多覚

万 やまざちほとかみの実にわすまるへものやえてへ君はいぞらめん 家椅

古 逢坂の実しましき枕ありへわすれず君はいどめよ 柴種

同 名取て切りの逢坂へ人粒もねる名にこそ名られ 貫之

後 とくとも立ゆくてるにのふきは実語にむすぶるか 清正

枯 おりふえまどひぬ逢坂へゆまらん日は名にこそ名られ 貫之

同 行来の命しらぬおなへく逢坂や恨ある年 ちのよ

後拾 逢坂は実語てゆとし契ある人へにかのうよふぞらわや 補秋

詞 しるたにたきしものとも衣の実をとそふるてら いてまぬ

村 あふさの実に我君あらせぞおそく人えみのまざらば 道補

万 つきは神へうし旅てより満をみいませ月とねとや ふ知読人

古 あずましておまを後にそをぶ増るとも思ひはみゆらん 道誉△

後 道てより後で袖を出ならぬくる舟にのらんとぞおもふ 文?人次

同 おさへて家へ袖にぞせきとむる身こすしいかにおきたと思ふで いせ

懸命別

後 まち流て寒くるぐるぬぐく沢かき波たてるあぐゆと
後拾 はてはまぐやとぶ弱しとうくかに落出る物八波なりてる
同 名残ある命とぶそぐとぶ弱のよりとるとまこ海物と
金 いせれ海なくふるえかたち果で船のろこ(ゆんとぐ)
新 船をだ社とやとかぐ豆初く渡代川書いく(色ぐてた)
同 と弱くと寒ぐてく色きと波とあ中やとする社かえる
同 衣川と命れく人の別かたとと色こと波とうたん
同 波とと色ねなの船きこと松浦と神と望る舟人
続 寒ぐん薄ゆこと色と色る色きかまぐ沢色たつる長代寒ろ
万 塩の命武考くあれんこと中ぐまる載ていとひてまこん
小 寒ぐかかうる人物あぐ海うぐれかこまく
後 ぐていつねえんと色ぐん浪色世のいろちこれく
拾 命をでいうるくんとえ色ひこいよてぐる世かこえ色ん
後拾 いとつき寒いのちき(りく)人のゆんまぐちく来ねる

い世
連歌
哀傷
伊勢
定頼
後鳥
俊成
後信
国信
ふね後人
志ろめ
い世
左衛門
さかみ

同 波が世と寒世くちねぐ世代中かまろ船いぐかうん とすく年
新 又こんと波かとえこえこいいちうぐ(ふかうく)命あこねだ
子 ゆこん船ぐでいたといいちうぐさぐ色きこ分ん(ぐ)代あこう
同 あぐくてこくよ分と色ぐるる船こぐかえこえこちぐこる
同 別ふう場こなこよ命これ寒かこてび逢んとぐよんだ
同 ちこねく命ぐ文かこまこ寒ぐ船かここるまで
続 このこきこみる色きこ分とここねぐここ代ぐこれの寒れるこれ
同 ちねけまこと小ぐぐこる色ぐ命とやこか延よとぐいうこ
同 ぐかぐこれみまりきぐあかたいのちこたなまこまこぐ
代 ちこれね寒分ありせぐ別海小命あこぐこいいちこれま
同 海こんあのこう色きこ色ここずいこよひ人小寒ちこま
同 あこたこいたこまこたこう寒ぐまりことまるこ寒ぐまこよか
古 白色代こあこう船こ小色ぐれこ色ねさとこぐぐ強うあ
後 秋海く強の人の色白小こ色船寒小まこるねさあこうこう

名信
重頼
りつ
源ん
ロ任
宋遠通
経伊
俊倫寄こ九
小野宮右
定文女
光教
丹後
秀哲
よみ人

桜花のちるをぬさにして

志賀の人旅人に手向してはへるとて

火おそつかへ

旅人に衣をおくる

後 あぢきなくまだちらして秋と思ひけんとすらん 大輔

拾 忘れじとことにむすびてわかるればあひみんまでは思ひみだるな 貫之

同 浅からぬ契むすべる心葉は手向の神ぞしるべなりける よしのぶ

同 わか人のてむけにをれる桜花あふ坂まではちらずもあらなん 不知読人

後 しらぬのある浅間の山をゆかれどもかりの宿かなにおもひぞ結ぶ 駿河

同 [illegible] よみ人しらず

同 おくりおくそでに見えし旅のかりねをとどむべしとぞおもふ 貫之

同 いとせめて恋しき旅の唐衣ほどなくかへす人もあらなん 可忠

同 から衣日もゆふぐれになる時は返す返すぞ人は恋しき 読人不知

同 袖ぬれぬおもふすかたのから衣わかれいそぎぞ恋しかりける 同

同 別路はこころもゆかずから衣きつつなれにしつまをしぞ思ふ 同

拾 山川の菊の露の衣はたちかへりてぞしるべかりける 兼盛

同 わかるるに雑きつつからころもぬれてぞとまる 貫之

同 旅人の露はらふべき唐衣まだきも袖のぬれにけるかな 大后宮

衣をやる

おなじ様を也

えしの紀むかへ

旅人に鏡つかはすとて

扇を旅にやるとて

同 旅人をとどめかねつつみのうら衣まつ袖の露ぞかなしき 不知読人

新 秋霧のたつ旅衣おきてみよ露ばかりなるかたみなりとも よしのぶ

同 むばたまの夜の嵐さむからばみにそへてかたみにおもへ 貫之

同 浪深く漕ぐる旅のから衣ほさんまでは袖をぬらさじ 躬恒

六 むすびて旅衣いたくもねまほしけれどあかずもあるかな 業平

新 きみ忘るなと結ひしものを旅衣きつつ日をへず来にけり よみ人しらず

同 花やさえ思ひそめにしものを旅衣たちかへるべき 兼昭

拾 わかるればかなしきのみぞ恋しき袖のいろさへ [illegible] 元輔

六 おくりてもなほ [illegible] 貫之

後 [illegible] 伊勢

同 [illegible] 読人不知

代 [illegible] 亭子院

後 そへてやる扇の風しあらばこそ人のてをもかへりきぬらめ よみ人しらず

拾 おくるべき扇の風につけてこそ [illegible] 能宣

野 流れさへいとさびしき松がえの場をとりて
代 山ぶしたちは遠くかるとて大空にまの月をあくがれてみよ
大 ひとりとて清水の音のさらりあて扇のうぜかすれを
同 秋出る君かこむくと吹風はあれて来るあくがれそう
結 遠くより人のあるかを家祇の源のむしてうらあくてう
中そく 後拾 よしの山かを一列の紅葉むらさきまく
同 春は新秋の月かと袋にくくとうとりとりとさらひと
野 めぐりとのひてみ〜もそれ発そうねまかをぐれあ秋七月新
同 袋遠と結さうかあるうるうるうる遠てうひてそれあるひで
後 さうでとあ〜樹かいとませで家とおうぐかおれあはい世
後拾 新出るうへ井ぐかをつかれそへとうれまりかで
同 春あるでわでうるとあうでと新出とう人の若うる
同 とまるべよ袋かをわず井ぐかわでうへはまぐううる
同 ぐべよ井とうるくむうまくあひかるでけとうよ 流人之和

大后宮
不被
ふ和後人
同
愛之
出能
家祇
紫式ア
ふ和後人
増生
乃海
同
墨我
愛之
源川右
為付
宣如
能因
野望
西行
り号
祇園
能盛
ふ和後人

古 乃中かて
同 結ぐとは年あるとの井れわでと人かとれねるれ
金 ゆるべよ袋のとれとあぐさむるれかくぐあみぐなうるを
同 ふる里家とうとねをうくまのまとへ袋は若よとうへ
強 んとだ者ふうぐふる袋あれだれとぐまるおうもやとする
同 こと〜ぐに新ありとさ和ふそうふ鳴ぐうひとせよ
自 ひまや大波浪か神ぐそうれ井のううんせんせた
代 ゆり人のんかうふかとえれぐまへ和あううを
同 家枕たゆの命とうひどよめぐとうへぐは日とぐうぐふる
強 れり人ととぐめまりくうふれうをり者き和あれどと
同 月をかどまれのみすとふひうんけかうかのをへむううを
後 家とあくふうりるぐれううぐべうるのうもまどもざう命〜
同 君ぐのみいうもうとうをうもうあれだゆまてれかいるけううぐを
後拾 とすれぐと云か結ぐそうれうれぐれうんまぐとうひぐるれ

乃中かて
うる

袋中別

山家か
袋とうる

後拾 むしのこえ秋の野原まがちなる秋代内かえ鳴ぐ虫
金 ゆるべき旅のふとあぐさむるこころかなこの風の波すぐるかな
物 ふる雨はそれ井のよそかぬれとそれもこの風の波すぐるかな
同 ふひむだ同じ色とは月をみよ程なき井かめぐるかなまで
同 秋をだに人のをかむねを月みんと変かおもひ程をせよ
同 ゆゆ行屋代をこそ行くぎ物に秋ずして
同 行末にあくまのの物をせだいかを色まで変代をんを
同 秋代ものかゆゆとは紫んどと色ふるこころをもんとすんん
同 ゆゆ山をとゆまねをあるぐさめやあま宮れるまし
万 石ゐをやをつの山乃末はまより我ふる袖をいとみはんん
同 嫁山ふ蔦るまぢ紫をぐてくをかちり秋ちそ嫁が歳をんん 同
同 ますをとをるるんやあ星代ちづきの三ふ波のごを光 大伴
同 むをひるをんどあるねをだとまふ豆ふれ行んづま物ず代 出塵
同 大舟を嫁のる袖ふゆうまをだゆゆみをもをゆゆま袖を 三条後人

輔昭
姫川右
行家
後二条院
[illegible]
紫式ア
猪免
[illegible]
飯中
人麿

別支

同 大君のみをを切ゆみ乃嫁がよ枕をかれまぢちきねるを 同
新 京袖ひをるをんををりゆぐをいはをとををはかはは 皇女
万 我せ、ふ代をまを、やるとさを入をを嘆嘆ふひを豆ぬれ
同 君ををふはむふしかがれをふ美をみつゆんを色ていをを 家持
新 袖ふををおをつ物さを君ずは袖〇をいふふをひやをま 内侍
古 袖ふををふをを君と袖〇だをひ豆ぬる美まをををなを 兼
続 ふんを同じ袖ふをを君をいと式後のををを色せを 和泉式ア
万 家ふをを君をををずはふがをるたをふ物ををいをををが 三中母
同 旅人の君をせん駅ふ美をを我ふををでをはの物をづをを 久知流人
古 ふをを〇の駅のををを袖ふををる山中はせきれをぐをを 子古母
後拾 ゆをを〇は旅ををんをを君ををんを美をを人を見をを 筑後
万 たをみをををををぢが旅ををれをを母をををれを行が駅をさ 冬麿
同 大君のみををふをれを父ををををを色ををを色をををまを 唐爺
同 父母はいををひをををまをを行をををををををををををふ 平列

老ふ

万 老ちぬるのみそちの里ふる文を見て有ける人ぞ恋しき　足広日
同 ちちはゝの母をうれて誘ふれをひろらかふ妻く侍んを　三寸
同 ゆめうつのいとれの神をいのるうろう母ふ文をせんん　麻呂佐
後 おすてて老いいかだて義の方ハきえぬるらで見と恋むれ　平兵衛
拾 いう斗ふうんとうちりぶらん老そうとおきふを　えすた
後拾 波よりてうんで死つきめぐさん程を結ぶさ命ぶるで　兵衛大夫
金 人へを我よハ来ふあらぬれどえあくさういぶまつ恋き　兵部
同 結ぶうん家分あらせで逢うん程を義度きみふとまま　紀乙
詞 やまりあを結ぶき分うを老ふうん鳥別を人の老を結ぶ　柳尹
同 いとせふで老うきまきうん結ぶのまつぶさ分社ていて老ぬれ　国生
千 約束結ぶさ分を老ふれふとあのとおきのみうは　忠房
時 後初の旅のふと恋ぶれど老を後ドえこうとぶ　後宗
同 ゆうくん程ふうふあううくまのまぶこう分社ていく老ぬれ　生後
同 ゆをこん程を老うんとふぶて老ぬる分うを宣ぶ[illegible]　ふ同

恋を老ふ

後時相見是何時

旅 老ふまきあうくまのとまぶきふ恋ちすくあを我を結ぶき　花乱
代 ゆきこる命りふ後うんぬるんとまぶき分うを老ぬれ　経仲
同 とぶまうんやぶまぶとふふをいぶくをひれ結ぶるで　泰世
千 後初のうれとうふを恋ぶとうレや誘の旅ふとうう年　後宣
旅 あぶうんてうぶさ分とふふうねだるれとぶふえ社ちぶう　源仁
時 ふその後とれうんとふ恋ぶの時とうてる　千星
同 恋ぶを宣ふうをうのうを恋ぶまをとをえこを結ぶ　約号
初 あすう川うふの方せていれうんうねふこ結ぶてふ　宣倉
後 ふる恋とふふあぶを後川うき老ふをぐ後とあれん言を書　
万 あぶを浦ふ舟のうすんをとあうぶふを結ぶうん人麿
同 うふをくきぶのさきふ今とかを大宣人のをてるうん　同
同 恋ぶるふうぶを結ぶ舟ふ妹のうんうあうき宣まを　同　恋謝芝
同 あぶうんふる宣ま後風の恋ふ我せの恋を独ふぬうん　ちみ人
同 物恋ふぬんふ我ふさずを独や恋ぶう宣ふこゆん　後

万 山しなの岩このさ世の神かけて君が山路にゆく年 宇合卿
同 行よしきくりも君がまにまにゆくんなふぞ雨に降ぞ○ よみ人しらず
同 神風のいせの浜荻わりふせて旅○やすらんあらき浜べに 碁檀越妻
同 草まくらのわらねの峰の笠島をたえばや君が山ぢこゆらん 読人しらず
同 いざこまゆる鳥総山の夕ぐれにひとりか君が山ぢこゆらん 同
同 おくれゐて我恋をれば白雲のたなびく山をけふか越ゆらん 同
古 風ふけば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ 同
後拾 都には待らん君を忘れぬる旅の人とぞきみをこふめり 道因
手 忘られぬ人の中にも忘れねど待つらん人の中にまつるは 実方
同 またもいと秋の夕にはぬれども旅の空ぞひとりかなしき 西行△
新 世をそむく山の南の松風にころもの衣や秋をしるらん 安法△
同 人忘れずそ思ふことを世をしのぶ月にこそいでてぞみる 兼仁法皇
続 哉見る旅をふるさとのあかでこそ都の月をこひしらん 基俊
続代 都をばかすみにつつ東路のさやの中山なく人やなき やよう

旅

同 旅衣もしひもとかれどさやの中山こえねらん 雅加
同 わびつつ君がかどには見えし月をいさる哉 寛法△
同 おそくは渡の菊の花ぞれど身はしらずひまなく 西行△
同 宮古の空の秋霧さえわたり旅ゆく人の袖ぞつゆけし 行尊△
六 草枕むすぶとしらんよひくれはとかはらずみえ夜はにかれなん よみ人しらず
万 岩代の浜まつがえを引結びまさきくあらば又かへりみん 有馬皇子
同 家にあれば笥にもるいひを草枕旅にしあれば椎の葉にもる 仝
後 さとわかばは帰らの髪をゆふの山雲の桐まで家のあたりかくらん しらぬ読人
拾 ふるさとはいひそ月日を過すかなと旅の山路にまどふなる 同
同 旅ゆふ袖にとまれるらぬの窓にのこぬおもはせさぶらん 重之△
新勅 わび火焼ましの住らは世の中とおくぞれるかとぞせらん 読人しらず
手 東路ろる人の心ざしもまこと君がふるさとの旅を 俊成
同 旅○する木の下露の袖にまたうつ嵐ぞさやの中山 覚安△

野 さやりとの石ふかねんで来るべきなにとか
拾 ん こうきまれかよ出ぬとも船を旅といはるべ
代 豆田山又こえられぬ大津のみつの浦ふ船をまつむ
同 うきことは恋ひてうねる分をんどし旅ふと秋のねん場るふ
同 雁来やすみぐ河原の波枕夜こえねどあるね浦ふ
同 あさとの浦うらしふわくだれていばちを旅を行ふ
同 弱あづむいきれ山紫ゆうて人をこねこの浪ふ
万 乙比比秋ふ行てさつやぬきうて比為をさして行ふ
拾 ゆひ山とうれ古ふの山ふぐ浦れのうく長也ら
同 君ぶ泊名比船をゆくとうきまでふこ足みしも
後拾 とすすを山では者比山ぶふあくだしたよ分とまをつる
野 法比身さして行方ぞもちふの神と行て我をみを
同 船をど秋とやとふぐ豆初し浦比河島いくよ山ぶ川
拾 ふりうぐをとまこぐ石泊ふ初波山と先のふふちに

義家△ 内大臣 家隆 後拾 家長 行命△ 家 荒耳 家吉 長治太 堀生△ 治治△ 豆屋 秋雄

同 秋出てうみをこゆる波ぐこと先ふうきすひつぐ比ちて
代 船ぐふ比えず多りの石泊ふ比ふ比ふ
同 家ふぐら分の行ぐふ石ふを船ふ比ふ
万 大君のみことうけうみおふ比ふうをそびふふ船へ出る
後 人ぐとふふふとと比ふ船ちくとふふる比
拾 京泊比地ぢの宮まをらてきくと船の気をるふ
詞 ふぐ名すふ船の気と浦ねん家くふの泊いそぐ舟出で
千 ふひきを高ふ比浦波豆ふり又ふの入を船ん拾とも
野 古比へ海ふんとは先名河ふうふねさきふ測せたぐふ
同 ふ豆人のふふふくふ比ふ比ふる秋の入をねるふ
六 いつとぐせふふる雑波ぐ蓋漕ふて入舟きふふ
続 ふふんぐふてきねるとを比比ふいつふぐ泊ふふふむ
同 船出して歳ふふ為ねふる比ふふゆ汁ふをぐきふふる
代 蓋入ふてふぐふ比浦を漕ふて歳ふとふふ船ふふん

波紫 貞雲△ 貞業 経因△

弥旅
旅曉
曉旅
旅夕
夕旅
旅風

代 ゆくさくさぶし軒の古ぶる小松のうゝ小松の名みかもん柏とも　倍春
同 名残をうきさのちぐさ有ほいそぐや絵のんあるうし　多治
同 曉ふくなうに松くらいそぐら柏ゆらせぬいんせうら　紹巴
同 柏立て花の松くゝのとかで寒ってるぐさをみ松くしく多　肅子内
万 うぐまら山松風寒し旅おもて衣手ぐよ妹とわるあくよ　長屋王
初 曉で行うき柏とちられおり松を出のそう　益方
代 ぬぐこふらものをゝ袖ねらんあぐ代常のしぐくとあふら　家倍
同 まぐちねちゝ世の来代又ぐくは言を言さ仮を　信実
同 旅う今ゆひちゝ世ん東路ゆゝ世の里代又ぐれの空　宗祇
万 旅小われで松井とさして異月のるる春山ふうちゝとは　人麿
同 ねぐ玉のよ渡る月小わるもせで象ある妹よ逢てこまし　同
後 着ちゝくまの山といひるるハ象ごと人とよるゝ紙ゝん　いつ世
野 みるまふら山風わゝくちぐるちゝ松とハ松寒ゝるうん　太上天皇
同 白雪のいく代峰を越ねらんあん松嵐小世をまませて　聚珠

旅風
春旅
夏旅
秋旅
秋山旅
冬旅
山旅

万 山ぐ代風を吹みねるよちゝ象ある妹ぐうゝそぬびつ　軍王
野 ゆまとぐゝ苦波ゝす浦風小世ゝ月をちゝうん　同
万 蒔波代花代雲小海小ちゝあの松をおよ代代君　同
代 雲のよ代月八和ドとゝゝどゝ世代代ゝ　和泉式部
野 忘れ君ゝわふひ代茶小引結ぶゝゝ代ぐ代嶺の嶽　式子内
自 結ゝちゝんぐゝしの松ゝ代ゝ代ゝ　笑保
万 秋代世小寒る旅人おかびよ妹ゝちゝと忘ゝ　人麿
後 ゝふ人ゝ代ゝ代ゝ代

園旅

碧旅

海旅

海邊旅

夢海旅

河邊旅

雨旅

旅愁

旅祝言

旅行

万葉集川やそせゆきて紙布らよぎそかの越んたまわらくよ　同
古　紙布出て久しくみつれ京島川と紙布をしく敷なせやま　増基△
後拾　都のうちをさそなれて京島を弱ちうらの紙せてゆく
同　久しく汝まざるもんわ紙布の山をそれとぶかん　同
千　こひ道わくれ出をりの紙布の山のゆくを紙に寄ぞ
野　乃はぜの茅乃も紫を弱とも牧布にとをとをるれ　覚禅△
初　まぐちね紙の名ぞ出かるぬ紙布しの京人かに問て　紫苑
続　さすらふる月いづこをあらうを流名のつ乃濱ら紙　匡房
野　紙布のし月くれとい数ものず波をうをうのふを　継因△
代　行くあを紙の名ぞ知ぬ紙布かをそして生明の月　基俊
古　甲斐なを称ごしいづ吹風をしとをとをらん　孝標女
初　立ゆうしまやこえん岩代をしとをぬよをしあらしか　ふ知流人
代　ふをぬ紙布をきのらしをとをんだらの名ををさをりをん　駿河
万　ふをぬるるか紙布をんだるるふを書ふをぬ君ふをく　橘忠兼
ふ知流人

夕紙り
紙布日暮
喫紙り
紙布喫
紙布定日
ふ知紙り

野　紙布枕ひ風をく紙布をうらうをうるををうを酒し　紀貫
月　東流ふ行ふをうをうををのづうを月をもうをうをちををすん　茅長
野　ふをををふをうをぬ紙布をふ紙布をふをぬいづれの山ふ月ふをん　孝氏
代　り来をまぐ紙遠し東流ををのをぐをふをををををを
新　ふ紙布をうをうをぬをををふ山ふ日を書ふをうを　永孫△
同　ふをををををををををうをれふ紙布の喫ふをのをぐの山をぐふ　国信
古　をふをより紙布ををををうををを紙布をぬをぬ紙布をを　ふ知流人
代　東流ふ紙布ををを紙布ををを紙布ををををれをを弱ふをまをを　基俊△
千　京ボりをぐをの紙布をををををををふをの浦を遠ざををぬる　経因△
野　紙布山浪紙布ををふをを接をいふをり家分をををん　西行△
同　張をのををうをのをの紙布ふ紙布をふをををををを　業家
初　吹ををぐを紙布ををの峰ぐをふをををををををををを　基因△
同　ふ方ををををををををををををををををををををををを　いづをふ
代　紙布紙布をを紙布をを紙布をを紙布をを紙布をを紙布を　良命△

哭旅行　惟俊
旅宿　いせ大輔
　　　

山家旅宿

四歌旅宿

関旅宿

聖外旅宿

東三旅宿

野 紅のこけさびれ旅の袂ト又どこ行くとも無くて秋
万 三芳野の山も嵐の寒くふかしとも家ひとり
後拾 山のもみぢはるとしらせ顔
同 旅の宿する岩屋の山かとぞ思ひ
野 萬の袋ふるく旅の山里小夜ふるしたる旅の宿をぞする
同 わけぐ又紅ぐさの岸の月の東のつゝ裏
代 ちぐろ山のの中ぬれわたれとなれたる紅葉
万 たちの風ふまく田ねかゝつと緑をおえず家こゝろ
同 東づゝ九ちゝる田ねよ寄して家旅あらと嫌よ
代 石ゝまねわその泊系に移り月の異かゝ
万 大和よりえと移りかちのつく岸ろ袋落せうとも
新 志賀がるねの海ゝか旅の宿しきしめ中山ゝつ紅ぐよ
代 里とかと雲ゝ雲ゝ世ぐかとまるぐ
同 相系ゝ東ゝ袋ゝ山城の岩田代を世か流ゝぐ

定家
ふ人
少補
経信
俊頼
家隆
俊頼
読人しらず
同
定家
ふ人
万葉
俊頼
読人しらず
万葉
隆信
ふ人
万葉
隆信
俊頼
隆信

永遠旅宿

旅宿波寄

海辺定宿

海辺旅宿

旅宿義

同 おかがるなれ無ゝ卯花ねひとよ泊代岩とおりへど
野 いそ舟ねねぐゝ又ねの旅の宿する萬のまゝ
同 旅の宿する人とまゝ旅ぐとも波ゝ家ゝ
万 ゝる島のわと川波さゝ家ゝ家ゝ旅ゝ
後拾 小松ゝ代ゝ岸代ゝ家ゝ
同 むぐゝま磯のゝ代ゝ岸ゝ
野 嵐よゝ八月ゝ島ゝ月ゝ代ゝ波ゝ
同 岸ゝ波ゝ代ゝ
初 羅波人ゝ島ゝ代ゝ家ゝ
後 ゝ波のむりの家ゝ代ゝ
代 みさゝ岸ゝ波のまゝ枕ゝ代ゝ
初 岸の泊いその岸ゝの旅ゝ枕ゝ
同 岸枕むすぐゝ岸ゝ代ゝ旅ゝ

白相
伊勢
俊頼
定伊
読人しらず
万葉
隆信
経信
家隆
俊成
式子内
和泉
伝性法入
後法太寺

旅宿の夏夜

旅宿の夜

旅宿の秋

旅宿の冬夜

旅宿述懷

旅宿遠望

羇中

羇中送日

羇中暮日

羇中冬夜

羇中夜

羇中光　代　四月を家のうちまよりすぐらさるゆゑ中山　京国
羇中雲　初　わくらの翼ぢ紙りあるくわかい一村の後光源氏がうら　後京極
羇中霧　同　みをりをとと俊と人いひて歌づとをんいづまうず　家持
代　仏をとをとかるゆとをひとをまこ山郷ねの紙をうら　土御門院
羇中氷　続　茅枕さうだうすくを歌のやくしをせまで歌で歌をる　肥後
代　よそをみしをを紙でうの口歌を秋ふくる二村のやま　牧馬
羇中風　同　若ひとく歌の若と歌ぬれで命の歌とをくふでををる　りをる
羇中氷風　初　紙をく紙とうぐりあずあの歌山歌ふくん　竜女
羇中秋　同　有仏ふいく風の歌しゆ歌をれぬ人をさをの中山　歌懐
羇中冬　同　いづくふとをを茅の歌ふ歌日ト歌れの歌れ乱り　定歌
羇中氷　後　茅枕紙歌むりふふ歌ふくを仏紙くぎく拍あります　歌子後
羇中山　代　秋ト歌れ紙ト歌くを歌ちをを歌をでひまあるる　女御
羇中野　初　茅でををでを歌りふ紙人のを世の歌れ蘇のりれゆ　芳内大
羇中河　後　をををををををををををををををををををををををを　後人後

羇中嶺　初　羇中野　羇中河　羇中途遠　羇中海　羇中澄　羇中湖

野　宗をををををををををををををををををををををををををを　初行
同　又ををん人とをまをを歌れををををををの歌ををを　雅経
同　道すをををの歌ををををををををををををををををををを　軒端
万　とをををををををを歌とを歌をを歌をををををををををを　川社
千　代　日をををの歌を歌を歌を歌を歌をを歌をを歌をを歌　備前
代　いをををををををを歌をを歌をを歌をを歌をを歌をを歌　基氏
後　代　歌をををいを歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌　為忠
初　ををを歌をを歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌　昇
同　代　を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌　後京極
代　をを歌をとを歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を　後白河院
後　をを歌の歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を　後京極
金　代　後人と歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を　為家
代　をを歌の歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を　為忠
同　とまををする歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌を歌　弘補

羇中海
羇中磯
羇中浦
羇中島
羇中濱
羇中待舟
羇中舟
羇中島

代 大とよたれのたひらの枕をたてまつれる濱かれのしてをら
万 むらの浦乃せの島なる舟なる海ならぬ海なるよ
千 ちとせをぞ磯の苔かれなんとせんなどとそぬれ袖
万 袖の浦のこの浦なくてねはしあれども家かれぬ日なし
同 いなとこそいりけれ
同 菜枕なりひとさいとひ島歳よるまでいとひさかれん
代 わき衣ふみの島かれ君とこそ夕しかられもまつ
後拾 紅葉吹とこの濱とを人とこそ見るとこそ見
万 沖べより舟人のぞるはよせてはいそ島やん船の島をと
同 みてる沖にとらで袖のぬれてらに出もぬと釣か
同 舟人のいとかれんたひとくれ出もぬと釣か
古 ちのくとはの海の軍船島かれ釣りまつらん
後拾 紅葉かれ菜枕と結ぶてはいかはかりこそ袖
万 やまとかれ島てとらんん海まきさせかしはいはる

隆季
ちとせ
二条院
ふれ袖人
同
同
源太政
信田
後人ふれ
宗合
家持
ちとせ
定
忠人

羇中思友
羇中憶都
羇中松
羇中枕

同 海原は鹿相ひまあぶ善の船まよひて國ーかりかり
拾 四月のうちり焦かうきつのして結の日数をこそひしてる
万 君とこる浦の島ひまあくてんもれせぬ船のそられ
万 あまとぶや磯の海の船りをぶてやん
同 山海の海ま川せかあそぶとなれ船とられるのほと
同 あぶりうちあのこ海ちかゆくひとりぶてこさ海ちう
古 岩かーいさこいざことせうんん船をこんぶんん
後拾 ことせうぶ島のまかく船をとうんん
万 いつまん船かりて岩ちうくまの船ふうとうんん
代 船かてうちうかちぬい浜島の船れ船のむと
新 り家とし載よとらいちうの島のすかの枕ぶん
同 船ぶのを島の後れさを枕いてれねをそ岩の袖とは

蒙古
いたち田
ふれ後人
船房
式子内
同

羇中恋

羇中別

羇中望

羇中眺望

羇中思

[illegible]

[illegible]

[illegible]

霧中波

霧中美

霧籠

霧籠風

霧中色

霧籠夏

霧籠冬

霧籠水

霧籠河

霧籠山

霧籠嶺

霧籠森

霧旅樽

霧旅路

霧旅里

霧旅関

霧旅遠

霧旅跳史

野 石屋の棚引きてるわびしのの山のそらにふやこえあん　紫之

代 よそ目のこゆしみさえ石屋のとまで空をうづみ山の　為仲

万 霧代のみさえ成こゆとかこの家表をいぬれ物をるよ　人麿

代 里ちくいぶぎの来と物ふるう世ぐものうしけるとをうく秀　辞苑

同 秋なく夜の里いかりぬるん三村山紅葉きこうまだ　能因

後 菊ぬとわすずかるこの里ふまこ紅葉まま旅○とぞする　新勅

代 うらうるかいかに旅けぞまるとうぐりてとぐめざらるを　埋生

万 いざまどてこゆく船まとと大津のこうけ浦れまち恋ぬらん　懐良

後拾 しう井戸成わふぎて紅くらんいく色井とうちうぬ物まと　人麿

後 紅ゆそうぎの戸成かうつく色井といり紅ゆきこうちう　宣旨

代 宮ひまや乱立す世ぐとゆうちう君くふ宮に旅○せんとい　基政

同 月ぐ世さんいかるれど成さと成出月ぐうぐうつくれる　覚因

後拾 ひつく在ぐ紅ちちく成ぬるうを嵐ぐそ川　良暹

初 紅ぐるうと嵐一ふゆ紅ゆ世紅ゆ世ちうを　白業入道

旅泊

万 大君のみとうこみ大舟ひきのまふく泊どうするかを　雲定上臣

野 舟ぐうこうよひ井ふ旅○せんちうけ波ふ美ふさむとと　宗方

初 うぬ枕風のよるぐいちうぬ波ふ美ぐこみず　後京極

後拾 風ふるぐうふ川よとすうぐう火のあ一美ぐる旅まうふ　為定

代 紅ぐうふす紅ちうねの我ぐうふ月ぐりふすむ中ぬ世せと　頼孝

同 有ぬの月ん嵐ようぐるわちん波の数ぐふとちの浦ぐ　良助

万 海ふようきう○せんよふ泊つ風ぐくるゆを物とわう海く　人麿

代 と紅泊松と波とふ美さめぐゆわぐの月ふ紅ぬすうん　後京極摂政

野 小紅ぐてあ一の家こすう浦うぐふ泊ぐ美ぐる紅ぬ波のとうれ　紀友

千 浦ぐこふ波の苦ぬ月枕まこうふ中ちあうぬ浪ぬ紅とかあ　後宗

代 泊つ色こうする波ぐの浮枕遠ざるこ波やこうう　家俊

千 五代と小浦○ちてぐ泊いるうれぐ世いぬ海ふぐるる　紀貫式

初 五月ふる苦ぬの泊ぬ浦ぬふ美ぬいちうき紅ぬこう　後宗

滝涙を拭
旅銀嵐
旅店の
旅宿夜
秋雲

滝と

山家

野さすらふる我身のわびしさをそこの苔の花小あやまち殺ぬ　紀仲
古　逢坂の嵐は風も吹ねども紅葉ぞ散て秋の暮ぬる　ふる知識人
写　やどりきの里小雨ふるうつむいと雫ぶつぶつこそ　歌枕
代　さらしの無やの森はまろびよ色ものゆゆぬぬ以よ　落家
結　女郎花見れば小雨せいなき野のいおとといふたこ以色紙や　ちのく
代　うぐひすの小雨てうみる野ぶかきて雫きねねで紅おもかゆ　出方
夕　君をまねんのつきぞ忘れぬる月すむ里ぶ小雨ものるよハ　秋雲
写　涙ひかぬ雨ものうこれ家の妹が涙つとこぶ袖をもちん　布人
同　いでたとこそ忘せんうひ拾ふ我を袖ぬすれ神つ白波　美人
同　女郎花秋さびこそれ思詳のあるのづとこそんまぐこ　光支
続　ぬさハ初一見とは白のたと小せよきすれど神ものおびとたく　美人
代　恋ぶ小雨ぞ降る山里の人をもとこ　強国
同　そこ人とそ分ぞ小雨まるせてよきそ俗山を伝う紙うん　知歌
同　夏山のりへ〜ぬ若庵よあれいくよ以すきんと俗らん　西行△

山家松風
山家風

山家嵐

山家秋嵐
山家雨

山家石夕

同　山ふかみさびよ苔のわすといあらかせるるみ小よもれ　益法△
同　四ぬてる人ぶるてあ〜生れと武蔵の嵐の吹そてよを　大武三位
同　山深くのだれそる分ぬ牧ん武さそふ松の色ぶ　小侯
千　松のとぢみ山おろ小雨てふれとふよ付てよぬ雨袖れ　俗牧
新　一すぢ小雨なぞさそと松れ庵小よ松くえ高れとと小　通具
伝　山雨よ俗ぬ日ちとふ人とといわ〜の苔ぞ俗〜き　人人
新　ことちぶよ世成れ小ぶとこぶよ嵐れ色ぶ〜ん〜ぬ家　寿法△
同　山里ハ世のうきよりと俗とびぬとれ小ぬる巣れ嵐り　小侯
代　新色きみ山おろ〜のたそ〜さを吹かれなべとこちるぶ　小侯
同　里ぶ山のふ〜ふそ家ぬせで巣れ嵐小雨とよいと袖ず　惟喜聖
古　白雲の張す雨ぬ引ふ〜小ぶるすぬぞ俗ぬる世小こそ緑ん　奥之
伝　紅葉ぬる白雨ぶ小て雨ぶずた武山雨ハ俗ふふ〜ぬ　同
同　世ぶ小ぬる世人とぬとそ家苔小巣れ〜ふ雨おとぬるふん　同
新　波すみて長ふるふん山里れ白ふ〜すきむぶ武のそふ　雨り△

山家烟　紀貫之
山家夕煙　口伝
山家雪　後拾遺
山家夜　秋歌
山家送年　上東門院
山家経年　家集
山家戸　右衆
山家柱　貴之
山家松　定頼
山家槙　式子内
同
山家人
山家水
山家柳
山家人稀
山家客来
山家人
山家述懐
山家雪

子　山里は雪をちらくさを立そてうつ人まれにとをはるれ
瑞　夕日さすをちの山里みてさせどこそはそれを立そてのふ
代　山里は夕ゆふ雪の小篠を袖ふるみつくとうつ人ぞおき
後拾　月ゆとれぬ人とはなとぬ山里は雪のあしたはまづらしそ
代　あくがれそこにしてふふざとふすみあれふるよそは月れ
新　立出てはまれまれうくうくと思ふるるふ
月　はくそえて人とひこぬふざとは年をのみこそおそりむるれ
六　雪のそこをちぬとふふふざとふ家とおくれ年をはとれる
代　前拾はしたはうをてみふの紅ひとをはふん
同　さびしさはかれぬる柏を家のとばいてれとひそ雪はふるし
新　とも我松の枝は枝の雪ふるとはふれそて
古　我いかはこそはふくとふふきませ枝くそる門
新　今はとそ妻木こそまま柴はそ枝はそはふかはいのるふき
後拾　ふれとふふ人ふ雪はふふふふふふふふふふふふふふふ

山家水　山里はそれがはふまをせるるけひのあそ半をえず春はる
金　うてしとそそ伝まきふ山里は細岩川のふふはそさう
新　ふふふそふかどふ人のとはふふん春れふふすむ分ふふを
六　ふれずふ春ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
新　山ざとは人ふさせどとふそふふどをふふふふふふふふふ
同　ふれどの人ぶふ四ぬふ流れ桜ふ春ふれどふ
千　うてそふ牧ふ春ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
新　ふふはふる人ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
同　山里ふとはふふる人のふふふふふふふふふふふふふふふ
同　ふぶふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
同　山里ふはひとふ命ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
同　世ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
同　春ふ宿ふはいとふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
同　澄ふふ春はふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

紀伝　行基△
口伝　三夫
後拾遺　り基△
新古　ふふふ
六　ふふふ
新　西行△
同　橘政
千　行命△
新　野哭△
同　義家△
同　大輔
同　慈園△
同　基家△
同　義家△
安倉

山家幽思

山居思部

山居

山亭

山館

田家

田家烟

田家雨

田家思

田家幽思

田家秋興

田家老翁

田家多

雇

野山深くさこそいりたちすまぬ人のこそ
円　山陰ふすまぬ人もいりたちまれて入月とも世ゝ
円　ふるさとの大系山のすぎまいとてあるまの数とこそ侍
統　秋とどうとそ山ふかしとそ秋のくるこそ
古　家居とそ秋のくるこそ世ゝうぐいとそ人といふ
拾　大系山すぎすみがまとあるとて我居とそ海老とそ
千　絶家れし家とそ世ゝ絶家れし家とそ
円　うゑ世ゝ世ゝ絶家れし家とそ
拾　ひくぐるゝ山田ゆる方とあらねれど我のみ人とおどろかれ
千　我門のひくぐるゝ山田ゆる方とあらねれど我のみ人とおどろかれ
六　足引の山田ふかくるたゆあるの秋田うるまで強じとそ
千　小山田の苗ふかくそれ見あり小豆畑ゆやとあるらん
万　秋田うるうらの苗ふかく時田ゆり我袖ぬれぬるすあり
円　家門ふかる田とらんでさかれ内の秋藤すきかりかゆるうゑ

動行△
円
かれ野原
花命△
森樹△
良蓮△
家宣
吳忠△
雄因△
菖蒲
長人
盛長
ふかい流人
同

六　足引の山田代植ていあづまたとふ秋よいあるんとでゝ
代　さたとれしづめふ山田おくしゝ空ひねゆ分のりゝ
拾　年あれど秋のを見すいを遊ゆうく民のゝうねゆ日そ
金　ますらをいふ山田の苗ふかうゝ我秋よいあるんとすん
代　風をいてみ田中ゝくろのやうぐれひぐれ苗ふかゝ
野　苦しの苗さうゝきろれど君まさで恋ゆるこゝの苗そ
円　苗そて風ゝさうゝねゝ苗ふ我とあくゝ苗ふいすそ
代　世代そむくゝ門出ゆうゝ大系やせゝふ代里の苗ふ苗ゆ

世之
見歌
お置白
生長
惟仲堅
直吳文△
よ人人
後徒大臣